

高麗知訥に及ぼした宗密教学の影響

「靈知説」の理解と受容を中心として――

胡 建 明

一 はじめに

本論は、曹溪宗の開祖であり、朝鮮佛教史上に於いて重要な地位を占め、天台宗の義天（一〇五五―一一〇一）とともに高麗佛教思想の双璧と並び称せられた高麗知訥（一一五八―一二一〇）の思想の中で、とりわけ中唐時代の圭峯宗密（七八〇―八四二）の思想の中で極めて重要な「靈知説」から与えられた影響について論究したいと思う。

周知のように、朝鮮半島の禪仏教は、新羅時代の入唐僧たちによつて伝來され、その中の大半は、洪州宗、いわゆる馬祖禪の系統を受け継いでいる。知訥もその中の一派である闍崛山系に属する。しかし彼の禪思想は、当時南宋禪林で盛んであった大慧禪（看話禪）の影響を受けながらも、既に法脈を絶つた唐代荷澤禪との思想的な絆が強く、特に宗密の「頓漸説」と「靈知説」が色濃く反映され、独自の「華嚴禪」思想を構築したのである。

本論は、知訥の禪思想の中に現れた宗密教学の一つである「靈知説」を中心として、論究してみたい。その為に、知訥の『法集別行録節要并入私記』（以下では『節要私記』と略称する）をはじめ、『真心直説』という著作にも注目しながら、彼の宗密の「靈知説」への理解と受容を論証していきたい。言うまでもなく、知訥の禪思想を研究することは、ただ高麗佛教思想の問題だけではなく、中国の唐宋時代の佛教思想に対する認識についても重要な意味を有するに違いない。

二 「空寂靈知の心」の理解と受容

知訥思想の中では、荷澤、清涼、圭峯が主張した「空寂靈知の心」が重視され、彼の『節要私記』には、

私曰…向來所謂解悟高明、決擇了然、正謂是也。問…據諸大乘經及古今諸宗禪門、乃至荷澤所説、理性皆同。云無生無滅、無為無相、無凡無聖、無是無非、不可説、不可証、今但依此即是、何必要須説靈知耶。答…此并是遮過之辭、未為現示心体。若不指示現、

今了了常知、不斷不昧、是自心者、說何無為無相等耶。是知諸教、只說此知無生無滅等也。故荷澤於空無相處、指示知見、令人認得、便覺自心經生越世、永無間斷、乃至成佛也。又荷澤收束無為無住、乃至不可說等種々之言、但云空寂、一切摂尽。空者、空却諸相、猶是遮遣之言、寂是實性不變動義、不同空無也、知是當體現義、不同分別也。唯此方為真心本体。故知始自發心、乃至成佛、唯寂唯知、不變不斷、但隨地位、名義稍殊。⁽¹⁾

とある。ここで知訥は、荷澤が唱えた「靈知說」は、あくまでも過を遮り、心体を示現する為に設けた、方便の說に過ぎないと論じる。即ち「知」の一字を以て、衆生に悟入を得せしむる、不可説である恒常不變たる真性の本体を表す為である。それ故に「知」とは分別の義ではなく、「知」を以て、發心、修行、菩提、成佛の全体を貫通するのであり、証悟の地位によつてその名義は異なつても、この「知」の内実を曲解すること無く、「知解」として誤解してはならないと説明している。彼は慧洪覺範の『林間錄』における宗密への批判⁽²⁾に對し、宗密を極力に庇つて、左記のように陳べている。

私曰、『裴相国上密禪師狀』云、宗徒各異、互相詆訛、莫肯会同。師亦云、言愚者、彼宗後學也、今辨明得失、皆為錯承宗旨、失意之徒明矣。洪覺範於『林間錄』中、斥破此師所判、扶顯洪州、牛頭之旨者、此師所論過失、似歸諸宗之主、恐惑後學之心故也。是乃古人對機門中、各有善權、不可如言、妄生彼我之見、當須將此明鏡、照見自心、決擇邪正、定慧双修、速証菩提。⁽³⁾

高麗知訥に及ぼした宗密教學の影響（胡）

ここでは、慧洪覺範の『林間錄』における神会と宗密への批判に對して、知訥は独自の弁解を行った。すなわち宗密が自著で表明した他宗への批判は、その宗主に對するものではなく、あくまでもそれらの後學の中の宗旨を得ていない者に對するものであるという。実際には覺範の見解は、單なる臆測ではなく、宗密は他宗についてその過失を論ずる際に、各宗の根源に悉く言及し、即ちその宗主の出自や得法の因縁、相承の傍正などを追求した。この点についての知訥の解釈は事實と反している。宗密による神秀の北宗への批判は、明らかに神会の主張を忠実に繼承している。牛頭、洪州の二宗への批判は、荷澤宗の立場から、當時その勢力がますます強大に成ることを警戒し、ある種の危機感に觸発され、禪の四宗（北宗、牛頭、洪州、荷澤）の中で、自宗の荷澤宗を優位に付け、それ以外の三宗を抑えようと考へたのである。

知訥は荷澤神会、宗密が主張した「靈知說」への理解について、頗る忠実であり、そして同時代の中国宋朝の禪僧たちの行きすぎた宗密批判には同調せず、宗密の思想を正しく捉え、吸収しようとした。知訥の『節要私記』の一節には、

問…既云靈知之心、直是真如自性、非緣境分別之識、亦非証悟之智、我等今者住妄識分別、求佛知見、如將黑串子、鍊作摩尼、徒勞精進、何時相応去哉。答…真如雖寂而常在万緣、妄想雖虛而恒冥一性、豈可不識根由、自生艱阻。『錄』中法喻、齊拳決擇、分

高麗知訥に及ぼした宗密教学の影響（胡）

明不穩微毫、只恐修心人、有如是疑退觀察力故也。……今明空寂靈知、雖非分別之識、亦非証悟之智、然亦能生識與智、或凡或聖、造善造惡順違之用、勢變万端。所以然者、以体知故、對諸緣時、能分別一切是非好惡等、雖對諸緣愛憎、嗔喜、似有起滅、能知之⁽⁴⁾心、無有間斷、湛然常寂、是知迷時、謂心為動、悟時則知心無起耳……

とあり、また、

此所悟離念心体、即諸法之性、包含衆妙、亦超言詞、故合忘心頓証之門、含衆妙故、有相用繁興之義、故此心性、有全揀門、全収門。修行者切須審詳。如密禪師云…以一真心性對染淨諸法、全揀全収。全揀者、但尅体直指靈知、即是心性、余皆虛妄。故云…非識所識、亦非心境等、乃至非性、非相、非佛、非衆生、離四句、絕百非也。全収者、染淨諸法、無不是心。心迷故、妄起惑業、乃至四生六道雜穢国界。心悟故、从体起用、四等六度、乃至四辯、十力、妙身淨刹、無所不現。既是此心現起諸法故、法法全真心、如人夢所現事、事事皆人。如金作器、器器皆金。如鏡現影、影影皆鏡。

とある。言うまでもなく、知訥による宗密の「靈知説」の把握は非常に正確である。彼は宗密の「摩尼珠の喩」を援用して真知の心性を縦横無尽に談じ、更に『華嚴經』、『起信論』、『楞伽經』、『圓覺經』、『楞嚴經』等の經論を引証して、唯心と如来藏の思想を以て、大いに「真心の靈覺」を論じたのである。『節要私記』四卷以外に、その他の著述でも心性論について多く論じ、たとえば『真心直説』一卷では「真心正信」、

「真心異名」、「真心妙体」、「真心妙用」、「真心体用一異」、「真心在迷」、「真心息妄」、「真心四儀」、「真心所在」、「真心出死」、「真心正助」、「真心功德」、「真心驗功」、「真心無知」、「真心所在」という十五節を以て真心の体、相、用等の妙義を論じた。彼は宗密の著述を援用する以外に、なお『金剛經』、『楞嚴經』、『起信論』、『圓覺經』、『肇論』、『永嘉集』等の多くの經論、語録を引用した。「如来藏思想」を中心とした心性論を深遠なる見地で説き尽くしたのである。「真心妙体」の一節で、「心」について、左記のようにその見識を披瀝している。

圭峯云、心也者、冲虚妙粹、炳煥靈明、無去無来、冥通三際、非中非外、洞徹十方、不滅不生。豈四山之可害。離性離相、奚五色之能盲。故永明『唯心訣』云…夫此心者、衆妙群靈而普会、為万法之王。三乘五性而冥歸、作千聖之母。独尊独貴、無比無儔、實大道源、是真法要。信之則三世菩薩同学、蓋学此心也。三世諸佛同証、蓋此心也。一大藏教詮顯、蓋顯此心也。一切衆生迷妄、蓋迷此心也。一切行人發悟、蓋悟此心也。一切諸祖相伝、蓋此心也。天下衲僧參訪、蓋參此心也。達此心、則頭頭皆是、物物全彰。迷此心、則處處顛倒、念念痴狂。此体是一切衆生本有之佛性、乃一切世界生發之根源。故世尊驚峰良久、善現巖下忘言、達摩少室壁觀、居士毗耶杜口、悉皆發明此心妙体、故初入祖門庭者、要先識此心体也。

又、最後の「真心所在」の一節では、
即十方世界、唯一真心、全身受用、無別依託。又於示現門中、隨

意往生而無障礙、故『伝灯録』云、温操尚書問圭峯曰、悟理之人、一期寿終、何所依託、圭峯曰、一切衆生、無不具有靈明覺性、与佛無殊、若能悟此性、即是法身、本自無生、何有依託。靈明不昧、了了常知、無所從來、亦無所去、但以空寂為自体、勿認色身、以靈知為自心、勿認妄念、妄念若起、都不隨之、則臨命終時、自然業不能繫、雖有中陰、所向自由、天上人間、隨意寄託、此即前真心、身後所往者也。

と述べている。『真心直説』の中で、宗密の言葉は二箇所しか引用していなかったが、然しその思想的構造は殆んど宗密の心性思想に基づいて成り立っているということは疑いない。言うまでもなく知訥の禅学思想の中には、中国臨済禅の思想も受容されている。例えば臨済の四料簡、十牛圖（知訥の牧牛子の号は恐らくこれによったもの）、大慧の看話禅等の思想的影響が顕著に見られる。とは言え、洪州宗の法孫である知訥が、あれほどまでに荷澤宗である宗密の哲学思想と実践思想を忠実に継承したのは、実に不思議である。同時代の中国宋代の禅僧たちと比較すれば、宗密哲学への理解は、知訥の方が遙かに理智的で、また非常に的確であった。宗密思想が海東の韓国で今日までなお衰えていないことは、知訥の功が大きい。よって韓国の学者たちにとり、知訥を論じる際に、宗密はもはや避けて通れない存在に成っているに違いない。

高麗知訥に及ぼした宗密教学の影響（胡）

三 結び

当然、知訥の他の著作でも、宗密思想は大いに吸収されている。たとえば『誠初心学人文』での礼懺思想や、⁽⁸⁾『修心訣』での悟修思想、⁽⁹⁾『圓頓成佛論』での華嚴成佛義など、知訥の数多くの著述でも、宗密思想をはじめ中国佛教思想の痕跡が少なからず見られる。本論は紙面の関係で、詳論を省く。ただここで一言に値するのは『看話決疑論』一書で、⁽¹¹⁾これは知訥が宋代の大慧（看話）禅を論じた著作であり、知訥の惺寂等持門、圓頓信解門、看話徑截門という三門修行の宗旨の中で、その前二門は教理であるが、看話徑截門は知訥の実践（行持）門であり、知訥思想の中でかなり重要な部分と言わざるを得ない。本論は主に知訥に及ぼした宗密教学の影響、なかく「靈知説」を中心とした論説であり、宋代佛教思想との関連については今後に譲る。

- 1 『法集別行録節要并入私記』一三頁a。（順治四（一六四七）年丁亥七月日、慶向道清松土普賢山普賢寺で重開の刊本である。）

- 2 『正新纂大日本續藏經』第八七卷、二五〇頁の『林間録』を参照。卷上に「密師以馬祖之道、如珠之黒、是大不然。即妄明真、方便語耳。略知教乘者、皆了之、豈馬祖応聖師圓識為震旦法主、出其門下者、如南泉、百丈、大達、帰宗之徒、皆博綜三

高麗知訥に及ぼした宗密教学の影響（胡）

藏、熟爛真妄之論、争服膺師尊之、而其道乃止於如珠之黑而已哉。又以牛頭之道、一切如夢、真妄俱無者、是大不然、觀其作『心王銘』曰：「前際如空、知處迷宗。分明照境、隨照冥蒙。縱橫無照、最微最妙。知法無知、無知無要。一一皆治知見之病、而荷澤公然立知見、優劣可見。而謂其道、如明黑都無為珠者、豈不重欺吾人哉。至如北秀之道、頓漸之理、三尺童子知之所論。當論其用心、秀公為黃梅上首、頓宗直指、徒曰機器不逮、然亦飢聞飽參矣、豈自甘為漸宗徒耶。蓋祖道於時、疑信半天下、不有漸何以顯頓哉。至於紛爭者、皆兩宗之徒、非秀心也。便謂其道止如是、恐非通論。吾聞大聖成世成就法道、其權非一、有顯權、有冥權、冥權即為異道、為非道。顯權則為親友、為知識、庸詎知秀公非冥權也哉」とある。

3 『節要私記』一四頁a—b。

4 上掲書、四七頁b—四八頁b。

5 上掲書、五四頁a—b。

6 藍吉富が主編する『禪宗全書』雜集部第一七冊（全百冊）四九〇頁上を参照。台湾文殊文化有限公司出版、一九九〇年五月発行。

7 上掲書、四九八頁上。

8 上掲書、四九九頁上では、「須知自身罪障猶如山海、須知理懺、事懺可以消除。」とある。この理懺、事懺の思想は明らかに宗密の『圓覺經道場修証儀』の思想から影響を受けている。或いは間接的に延寿の思想に影響を受けたのかもしれない。

9 上掲書、五〇六頁では、「夫入道多門、以要言之、不出頓悟漸修兩門耳。雖曰頓悟頓修是最上根機得入也。若推過去、已是多生依悟而修、漸熏而來。至於今生、聞即發悟、一時頓畢。以實而論、是亦先悟後修之機也。則而此頓漸兩門、是千聖軌轍也。

則從上諸聖莫不先悟後修、因修乃証。所言神通變化、依悟而修、漸熏所現。非謂悟時、即發現也。如經云：「理即頓悟、乘悟併消、事非頓除、因次第尽。故圭峯深明先悟後修之義、曰：「識水池而全水、借陽氣以鎔消。悟凡夫而即佛、資法力以熏修、水消則水流潤、方呈漑滌之功。妄尽則心虛通、応現通光之用。是如事上神通變化、非一日之能成、乃漸熏而發現也……」とある。

10

上掲書、五二二頁下—五二三頁で、「此中所論悟者、非先修而後悟故、是解悟也。雖是解悟、以頓發悟處故、即不可說果分性海同也。又以一乘佛果、法爾在十信初心、非当果融攝之論也。若約後修緣起門中、功終願滿果德論之。又約本智体中圓三世事論之、則亦如弥勒樓閣中所現弥勒三世因果」とある。ここでは宗密への引用に言及されていないが、然しその思想的観点から言えば、宗密思想からの影響が大きい。ここでは法藏、義湘、李通玄、清涼及び禅門の永嘉玄覺、大慧宗杲等にも論及し、知訥なりの禅教融合の成佛論となっている。またこれこそが典型的な「華嚴禅」の特色のある論書であるに違いない。

11 上掲書、五二七頁上—五三一頁下を参照。

〈キーワード〉 高麗知訥、『法集別行録節要并私記』、『真心直

説』、宗密教学、靈知説

（駒澤大学佛教経済研究所研究員・文学博士・哲学博士）